

ある新聞奨学生之死

黒藪哲哉

ここに、一人の新聞奨学生の死体
検案書がある。

名前：上村修一

職業：専門学校生

発病年月日：一九九〇年二月四日

死亡の原因：イ、脳圧迫。

(イ)の原因：小脳出血

死亡場所：東京都三鷹市新川六一二

〇一一 杏林大学病院

新聞販売店の 驚くべき労働実態

読売新聞・調布サービスセンターは、東京都調布市の繁華街のはずれにある。七階建のマンスションの一階を、作業所や事務所を兼ねた店舗に於て、二〇人ほどの従業員が読売新聞や同系列の新聞の配達に携わってきた。表通りに面したガラス戸は埃が付着してくすみ、近くの甲州街道を走る車の騒音が深夜まで絶えない。

一九九〇年の三月二四日、上村修一は大阪から単身上京して、調布サービスセンターの所長・久尾育史が所有するアパートに入居した。新聞奨学生として働きながら渋谷区にある日本レジャー専門学校へ通学することになっていたのだ。スキューバダイビングの指導員（インストラクター）になることが修一の高校時代からの夢で、家庭の経済事情を考慮

して、働きながら学ぶ道を選んだのである。

当時はバブル景気のころで、新聞販売店はどこも慢性的な人手不足に悩んでいた。巷に職が溢れているときに、給与もかんばしくない新聞配達業に好んで従事する者はめったにいない。採用してもすぐに転職してしまうのが新聞販売店に共通の悩みであった。久尾が、修一ともう一人の新聞奨学生の採用に踏み切った背景には、こうした状況があったものと思われる。

久尾は全部で五店もの新聞販売店を兼営していた。それは優秀な新聞販売人としての腕を、読売新聞本社に認められた証拠でもあった。それぞれの販売店に腹心の店長を置き、店から店へと足を運び、総監督のように全体の経営を管理する。修一が配属された調布サービスセンターは、そんな販売店のひとつで、店長・松本敏雄が実質的に従業員を取り仕切っていた。修一はこの販売店で社会人としての第一歩を踏み出す。しかし、高校を卒業したばかりの青年の夢は、わずか半年余りで、過労による急死というかたちでもろくもついで去ることになる。

私が新聞販売の現場で働く人々の労働実態に関心をもった直接のきっかけは、自宅で購読していた日刊紙の集金員から、新聞社の近代的なイメージを一変させてしまうような裏話を聞いたことであった。ある冬の深夜、おそらく午後十一時を過ぎた時刻だったと思うが、購読料の集金にやってきた新聞奨学生と話しているうち、その学生が毎朝、午前二時四五分に起床していることを耳にしたのであった。新聞を積んだバイクが街へ繰り出すのは四時ごろでも、その前に新聞の搬入作業やチラシを折り込む作業があるので、三時過ぎには作業所に到着しなければならぬという。午後からは夕刊配達の後、翌日の折り込み広告の準備や、集金などの業務があり、仕事から解放されるのは午後九時や一〇時を過ぎることも。厳しい労働に音をあげて退職すると、社宅を追い出されるだけではなくて、学校の授業料に相当する奨学金も即刻返済しなければならぬ。こうした実態が、正義や公正を旗印にした新聞業界でまかりとおっていることに私は驚いたのだ。

新聞配達の要員として学生を雇用するわけは、新聞販売業界を構成する労働人口に、いわゆる不安定就業者が占める割合が高いことに関連している。新聞の宅配は人力に頼る以外に方法がない。配達員がひとり辞

めると、すぐに代理を見つけ配達ルートから購読者の住所まで教えなければ、新聞の宅配が滞る。その点在学の期間は確実に戦力になつてくれない新聞奨学生の貢献度はきわめて大きい。自力で勉学に励もうという青年たちだから、人並み以上に根気もある。日銭が目当てで新聞配達をしている者よりも頼りになるというのが、販売店の経営者たちの本音らしい。しかも、奨学金で縛りつけているので、多少の無理難題を持ちかけた時、酷使しても退職しづらい状況にある。

私は午前三時を過ぎたころ、近くの新聞販売店へ足を運び、暗がりからそっと中を覗いてみた。すでに人影があった。ジャンパー姿の数人の男が、作業台や椅子に腰を下ろしている。話をしている様子はない。やがてトラックが到着すると作業員たちが店から出てきて、急に気合いが入ったかのようにバケツ・リレーの要領で、手ぎわよく新聞を店内へ搬入しはじめた。作業は五分たらずで終わり、トラックは暗闇の中に赤い尾灯を光らせて遠ざかっていった。

学校との両立は 不可能な職場

上村修一の日課を、残された資料



修一の勤めていた読新聞・調布サービスセンター。(写真撮影/筆者)

と証言をもとに再現してみる。タイム・カードによると、死亡した二月四日は、午前三時九分に出勤している。その前日の三日は、午前三時七分、二日は午前三時の出勤であった。アパートから職場までバイクで五分と計算して、いくら遅くとも二時五〇分ごろには起床するのが修一の日課だったらしい。朝刊の配達が終わるのは通常、六時半ぐらいである。修一はそれから仮眠を取った後、一時間かけて渋谷区にある日本レジャー専門学院へ電車通学していた。

授業は午前九時三〇分に始まるが、木曜日の「スイミング」の授業だけは例外的に八時五〇分が開始の時刻であった。当時の担任講師・播磨伯穂は、修一について、非常に遅刻が多い生徒だったという印象を持っている。仮眠して、つい寝過ごししていたのが遅刻の原因なのか。播磨は語る。

「このまま遅刻を続けると実習に出られなくなる」と注意しますと、その次の日から、学校の校門が開くと同時に中へ入って、教室で授業が始まるまで寝ていたのを覚えていませう。かなり辛くならないと口に出さない性格だったので、どうしていいの判断に迷ったものですが、こいつ相当骨のあるやつだなと、好印象を受けたのを覚えております。相当の頑張り屋でしたよ」

最終の授業が終わるのは午後三時二〇分であった。ところが修一のタイム・カードに示された午後からの出勤記録によると、午後三時半にはすでに販売店へ到着している日が大半を占める。一月の記録にいたっては、午後二時台に出勤した日が一〇回にもおよぶ。これでは所長の久尾に勉学を優先させる配慮がない限り、学校と職

場の両立は不可能である。奨学生募集広告に記されている「入学から卒業まで安心して学生生活が送れます」という言葉が色あせてしまう。

死亡した四日は、午後三時二〇分に夕刊配達のために入店している。夕刊の配達後、販売店で夕食をすませ、テレビを見ながらしばらく休んだ。それから古紙を回収する作業に出掛けた。日によっては、購読料の集金にまわることもある。修一は「疲れた。」と呟いたが、同僚の従業員に励まされて重い腰を上げたという。軽の四輪パンを運転したのは同僚で、修一は助手席に座り自分の担当地区の中を案内した。ちなみに、読売英英学会が発行している『奨学生受け入れの手引き』によると、「奨学生にさせてはならない業務」として古紙回収が明記されている。

修一の身体に顕著な病状が現れたのは、古紙回収を終えて販売店へ戻り、次の作業である折り込み広告の準備に取り掛かってからだだった。気分が悪くなり嘔吐した。それから木製の作業台の上に横になって安静にした。作業を続けていた同僚たちが修一の蒼白な顔色に気づき、大騒ぎになったときには、意識はすでに失われていたという。救急車で杏林大

「古橋」を尊敬する 修一の肉体が……

修一が通学していた日本レジャー

専門学院はダイビングなどスポーツの指導員の養成を目的とした二年制の学校で、修一はマリネジャー科に入学した。

ダイビングは一定のトレーニングさえ積み上げれば、だれにでも手軽に楽しめるスポーツで、若い女性にも人気がある。しかし、指導員の資質となれば話は別。人命を預かる以上、ダイビングや救命の知識や技術はもとより、強靱な体力を養わなければならない。日本レジャー専門学院の場合、四〇メートルを、少なくとも八分程度で泳ぐ力を身につけさせることを目標としている。器具を使った筋力強化なども授業の中に組み込まれていて、科学的で厳しいトレーニングを実施している点では、大学の体育学部のレベルにさほど引けをとらない。安易な気持ちで入学してきた生徒は、厳しさに耐えかねて、学期が進むにつれて学校へ姿を見せなくなるという。

修一は中学生のころは陸上部に、高校生のころは水泳部に所属していたので体力には自信があった。母親のカズ子に、トライアスロンに出場したいと話していたこともあるらしい。奨学生の選考に使われる自己紹介のための書類によると、特技として「持久走、水泳」を、尊敬する人物として「父、母」に加えて「古橋廣之進」の名前を明記している。古橋はかつての世界的な水泳選手である。播磨によると、修一は入学した当初、水泳ではクラスの中でも五本の指にはいるほど泳力のある生徒だ

った。しかし、新聞販売店での労働が肉体を蝕んでいったのか、徐々に身体の不調を訴えはじめる。

新聞販売店の業務で、最も根気のいる作業は購読料の集金かもしれない。集金は月末の二五日から始めて、翌月の一日までに終了する販売店がほとんどである。現在は廃止の方向へむかつてはいるが、かつては未集金分の金額を、集金員の給料から天引きすることが堂々とまかり通っていた時代もあった。そのために、まじめに働いていながら、従業員が帳簿上で店に借金する理不尽な事態すら生じていたのだ。これに類似した状況が水面下ではいまだに衰えず、借金で火だるまになった従業員が、夜逃げするケースも実際に起こっている。新聞専門紙には「東京情報」のように、こうした人々を犯罪者として、顔写真入りで指名手配する欄を設けている社もある。

現在では一軒集金することに手当をつける給料体系が主流になっているが、集金がはかどらなければ手取り額に影響する点では昔と変わりない。修一は約三〇〇部の配達と集金を担当していた。修一の給料明細書をもとに、集金手当が総支給額に占める割合を計算してみる。一月の場合、総支給額が一五万五七〇五円で、このうち集金手当が四万六四一五円。総支給額の約三割が集金手当で占められている。ちなみに、この月の差引支給額は八万六九四二円である。「食費」や「前払金」「光熱・管理」「カード料」などの名目で六万



高校三年生の時の修一、スキューバダイビングのインストラクターをめざしていた。(写真提供/上村三恵)

八七六三円もの金額が差し引かれている。所得税は計算されていない。健康保険料も計算されていないが、これは修一が遠隔保険証を所有していたことが理由だという。

集金で購読者の自宅を訪問しても留守の場合は、再三にわたり足を運ばなければならぬこともある。また、在宅していても快く支払ってくれるとは限らない。ことさらに集金の日時を指定して再来を命じたり、居留守を装ったりする購読者もいる。短気を起こして衝突すれば、購読を中止され、歩合給に影響してくる。そのうえ失った部数の回復を命じられかねない。こうした多様な人間関係の重圧で、集金員が背負う苦痛は計りしれないものがある。

東京都新聞販売労働組合が新聞販売労働者を対象に行なったアンケート調査によると、読売新聞社の場合、一カ月分の購読料を集金するのに要した平均時間は六四時間だった。集金に割り当てられる日数は通常一五日間だから、一日に換算すると四時

間強の集金時間になる。これでは休日を集金作業に割り当てたとしても、平日の夜も作業を続けなければ、集金は完了しない。集金業務の苦痛について修一は、死後に残されたノートにこんなふうにつづっている。

「月末二五日から三一日までの間で、全金額の八〇%のノルマがあり、月初めの間に(残りの)二〇%を目標に集金をします。釣銭を間違えたり、客から文句を言われたり、大変気をつかい、この頃前髪が薄くなってきたような気がします」

「疲れた。もう新聞配達は辞めたい」

遺品の財布の中からは「渡部」と記入された領収書が発見された。なぜこの領収書だけ切り離されて財布の中にあつたのかを推測するとき、なかなか購読料を支払わない渡部氏の分を自分で立て替えて販売店へ納金したために、ほかの領収書との混入を避ける必要が生じたのではないかと、この仮説が成り立つ。集金のノルマを達成するための工夫だったのではなからうか。ノルマの未達成に対して、なんらかのペナルティが科せられていたとすら推測できるのだ。

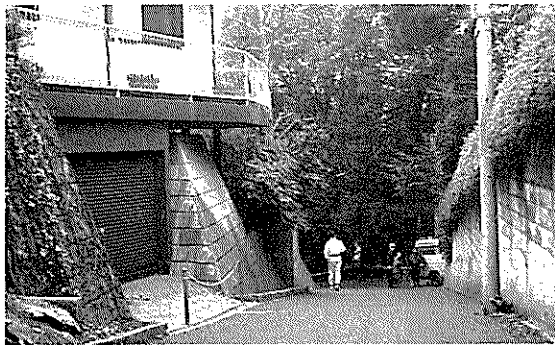
修一は一日の仕事を終えると公衆電話から、大阪の自宅へたびたび電話している。母親のカズ子によると、電話が鳴るのはたいいて午後九時か一〇時を過ぎた遅い時間帯だったという。自立心の強い青年とはいえず、まだ一八歳である。社会や人間関係の荒波の中で、ひとり憂鬱にみまわ

れたとき、望郷の念にかられたのかもしれない。

修一が予想できなかったもうひとつの業務は、部数拡張である。調布サービスセンターの給料明細書には「カード料(手当)」という欄がある。これは新たに新聞購読の契約を取ったり、更新に成功したときに支払われる歩合給で、修一の場合、六月、七月、一〇月、十一月にカード料がついている。当時朝日新聞社との激しい部数拡張競争の中で、部数一〇〇万の達成まで、わずか三〇万部にせまっていた読売新聞社の販売政策から推測すれば、奨学生までも部数の拡張になんらかのかたちで動員していたとしても不思議はない。久尾も松本も、新聞購読の戸別勧誘を修一に命じていた疑いについては全面的に否定しているが、公式の給料明細書のなかにカード料が記録されている以上は疑惑が残る。

日本レジャー専門学院では、毎年夏休み明けに大学という学園祭にあたる行事が行なわれる。その中のプログラムのひとつに「体験ダイビング」と呼ばれるものがあつた。これは素人にダイビングを指導する実習で、参加者に対しては事前に適性調査が行なわれる。参加を希望していた修一は、次の質問項目に「該当」を示す丸印をつけた。

☆関節の腫脹(はれること)、関節痛はありますか。
☆年中咳が出たり、痰がからむことはありますか。



修一が配達していた区域は急な坂道が多い。(写真撮影/筆者)

☆極端なうつ状態になったことはありますか。
☆短期間にひどく体重が減少したことはありますか。

当日になると修一は、ダイビングの代わりに、受付係をやらせてほしいと播磨に申し出た。四月から体重は五キログラムも減少しており、身体の不調を押して、水中に潜ることにためらいを感じていたのかもしれない。あるいは恐怖心か。播磨は修一の希望を承知したが、念のために面談している。その時に播磨は、修一が初めて弱音を吐くのを聞いたのであった。

「要するに、疲れていると。それで正直に言って、もう新聞配達は辞めたいと初めて口にしました。その頃、よく校舎の前のコンクリートに足を伸ばして、疲れた顔をして座っていたのを覚えていて、気がないとい

たのを覚えています。気のないというか、抜け殻みたいな状態であったことを覚えています。前期はがっちりした印象があったんですが、後期は頬が少しこけて、疲れた感じがありました。若々しさはもうなかったです。周りでほかの学生が騒いでいても、彼は下を向いてぼっとしているように見えました」

修一は肉体的にも精神的にもぼろぼろになっていたらしい。学校を続ける自信すらなくなったという告白を聞いた時、播磨も隠さずに自分の考えを正直に打ちあげた。それが播磨の流儀である。播磨は修一に、今の状態で学校を続けても、ダイビングの指導員としての技術を十分に身につけることは難しいと説明した。厳しいトレーニングに耐えて、指導者になった播磨にしてみれば、病の気配が漂う受け持ちの学生に、これ以上の負担を与えることが憚られたのだろう。

しかし、修一は依然として内心では学校を続けたいと考えていたらしい。ダイビングの指導員になりたいという夢を捨て切れなかったようだ。播磨に対して新聞配達以外の職場を紹介してほしいと相談を持ちかけている。しかし、アルバイトで学費と生活費を稼ぐにせよ条件のいい仕事は、どこにもあるわけではなかった。それに、新聞奨学生を辞めれば、八〇万円の奨学金を一カ月以内に返済する義務が生じるだけではなく、社宅として入居しているアパートも引き払わなくてはならない。

別のアパートに入居するとなれば、敷金や礼金だけで二〇万円ぐらいの資金が必要となる。修一は、奨学制度にがんじがらめに縛りつけられた自分に気づいたのであった。

集金歩合給なしでは生活できない

修一が集金作業をしていることを、カズ子が電話で知ったのはこの頃、秋も深まる一月に入ってからである。それまでは朝刊・夕刊の配達と、雑務だけに従事しているものと考えていたのだ。修一が高校時代に目にした読売英英奨学生募集の広告には、勤務条件として「朝・夕刊各々二時間の新聞配達と、一時間の折り込みなどの付随業務」と明記されていたからだ。集金をしていると聞いて、まったく意外だった。

カズ子は電話で修一に集金作業を辞めるように説得したが、業務の分担を奨学生の身分で勝手に選べるものではなかった。修一が集金作業から身を引けば、彼が受け持っている区域の集金を肩代わりさせられるのはほかの従業員である。それに給料の三割を占める集金の歩合給なしには、東京での生活は苦しい。

一月三日。この日の夜、カズ子が修一から受けた電話は、息子と母親の最後の会話となった。急死の一日前である。集金作業の途中だったらしく、街の公衆電話からの連絡だった。

「午後一〇時半過ぎやと思いましたので、『もう今日は早く帰った方が

いいよ』と言いました。すると『もう三回も同じ家に足を運んだ』と言っていました。なんか声がおかしかったので、『風邪ひいているの?』とか聞いたように覚えております。『集金はもう辞めたほうがいいよ、身体を壊したら大変だから』と言いましたが、『二月まではやる』と言っていました」

九〇年は台風の当たり年で、秋には雨もようの雨が降った。特に一月の末は、季節外れの台風二八号の影響で、大雨が降りつづいていた。雨の中の新聞配達や集金は、体力を消耗する。雨具を身につけていても、体温の放出を防ぐことはできない。ナイロン袋に新聞を入れる作業にも手間どる。冷たい晩秋の雨が、弱り切った修一の身体を打ちつづけた。

私は修一が新聞配達と集金を担当していた調布サービスセンターの第一二区と呼ばれる区域を自転車で行って見た。修一が死亡した時期と同じ二月初旬である。陽は降りそそいでいたが、乾いた冷気が肌を刺した。街の中を縦断する野川とよばれる川にかかる短い橋を渡ると、高い丘が屏風のように横たわっている。曲がりくねった急な坂道が続く。私はペダルを踏むのを断念して自転車を押しはじめた。修一は毎朝、同じこの道を新聞を満載したバイクで登ったのであった。折り込み広告が二〇部入った新聞一部の重さは約四六〇グラムである。新聞一五〇部の場合、約七〇キログラムになる。

道路交通法では、三〇キログラムが最大積載量である。それを超えると危険を伴う。坂道で重いバイクのバランスを取ったり、スタンドを立てたりする作業は、傍から見るとはるかに過酷だ。そのうえほとんどが一户建の民家なので、団地のポストに新聞を配達するようなわけにはいかない。なぜ、仕事に手慣れない新人の奨学生が、こんなやつかいな地区を担当させられたのだろうか。父親の上村二活も、私と同じ疑問をいだいていたのかもしれない。

二活は、修一の死後この地区を自分の足で歩いてみたという。けわしい坂道の中腹で立ち止まり、バイクで夜明け前の街をいく息子の姿を思い浮かべたかもしれない。そんな上村父子の姿を想像させるほど、あたりはもの静かだった。風も休息している。淡い陽ざしの下に、調布市のおびただしい屋根やビルが遠くまで広がり、冬枯れた野川の対岸には、かつて修一が住んでいた二階建のアパート「リバーサイド久尾」が見えた。

元凶は新聞各社の部数拡張競争

日本の新聞社が世界に類のないほど巨大な購読者数を獲得した背景には、新聞の戸別配達制度の存在が決定的な要素としてひかえている。欧米諸国にも、新聞を自宅へ届けるシステムはあるが、日本のように全国に販売網を張りめぐらせて、配達が遅れないように午前三時から販売店を稼働させるような状況はない。休

刊目を除いて、朝食の時間帯には自宅へ新聞が届くサービスのよさが、発行部数を飛躍的に押し上げていったのだ。新聞社相互の部数拡張競争が続くかぎり、新聞が自宅へ到着する時刻は、早まることはあっても、遅れることはありえないだろう。

日本ABC協会の調査によると、九七年一月の時点で、『読売新聞』の発行部数は約一〇二万六〇〇〇部だった。このうち約一〇一八万四〇〇〇部は宅配され、約三万一〇〇〇部が駅の売店などで販売されている。ほかに郵送分が若干あるが、圧倒的に戸別配達制度におんぶした日本の新聞社の経営実態が見える。ちなみに米国の『ニューヨーク・タイムズ』の発行部数は、九六年の調査で約一〇七万部である。フランスの『ル・モンド』は約三七万部にすぎない。

調布サービスセンターの所長・久尾育史は大阪商業大学を経て六八年から武田薬品工業に勤務した後、新聞販売業界へ足を踏み入れた。毎日新聞社の埼玉県・大宮中央専売所で専業従業員として働いていたところを、読売新聞社から引き抜かれるかたちで、栃木県の大田原専売所の所長に就任する。その後、経営の才覚が認められて、読売新聞社の販売店ばかり五店もの所長を兼任することになる。『新聞販売店名簿』（新聞通信社刊）をひもといてみても、五店もの販売店を経営している人物はきわめて稀だ。

有能な所長として発行本社の信頼

受賞の言葉



くろやぶてつや一九五八年兵庫生まれ。九二年「バイクに乗ったコロンブス」現代企画室が朝日ジャーナル大賞受賞。日本ジャーナリスト会議会員。

私にとつてジャーナリズムとは、陽の当たらぬ領域を、照らした作業です。あるいはタブーへの挑戦。幸い私には、原稿を検閲したり報道を規制する上司はいません。派閥もありません。誰に気兼ねすることもなく、心地よい自由の風を受けて、ペンを走らせました。こんな私のルポに光を当てていただき、本当にありがとうございます。ありがとうございました。

黒藪哲哉

らない。久尾は中学生の頃、故郷の富山県津沢町（現在の小矢部市）で新聞配達のアルバイトをしていたという。飛び抜けた新聞販売店の経営力は、少年のころの体験とならんかの繋がりがあろうか。

それにしても、新聞社はなぜそれほどまでに部数拡張に奔走するのだろうか？ その根底にあるのはブランドやライバル意識だけではない。新聞社の組織自体が巨大化したために、それを維持するのに見合った収入をあげる必要性に迫られているのだ。いわば身体が巨大化しすぎて、多量の食料収集にみずからの生存をかける恐竜のような存在と化しているのだ。部数の伸びが、新聞の販売収入だけではなく、広告の掲載料をも引き上げることはいままでもない。こうした仕組みが企業との癒着を生み、ジャーナリズムを死の淵へ追いやった。

事件から四年目を前にした九三年

こんなこと、やっています



「脱」宣言判」を楽しむ会

小林よしのり氏が好き勝手に流布した「従軍慰安婦」問題でのデマと虚言に本格的に反論してくれた批判書、「脱」ゴーマニズム宣言（上杉聡著・東方出版）その中に引用した漫画の転載が著作権侵害に当たるとして小林氏からの提訴がなされました（詳細は本誌200号（二月一九日）今週の反撃」参照）。

小林よしのり氏が好き勝手に流布した「従軍慰安婦」問題でのデマと虚言に本格的に反論してくれた批判書、「脱」ゴーマニズム宣言（上杉聡著・東方出版）その中に引用した漫画の転載が著作権侵害に当たるとして小林氏からの提訴がなされました（詳細は本誌200号（二月一九日）今週の反撃」参照）。

被告である著者と出版社を応援すると同時に、この裁判をいかに楽しんでしまうかを念頭に置き「楽しむ会」を発足させました。

二月二十七日に行なわれた初の裁判では、老若男女三十数名の仲間が傍聴席は満席。原告である小林氏も現れ、さっそく漫画のネタをスケッチし始めたのですが、被告側よりの中止勧告を裁判長が認め

市民運動グループの自己紹介欄です。連絡先（住所・電話番号）を含め15字×40行で「こんなこと、やっています」係宛にお送りください。掲載の場合はご連絡します。

一二月三日、上村二活と妻のカズ子は、読売新聞社、東京読売育英奨学会、それに久尾育史を相手取って、総額で約六九〇〇万円の損害賠償を求め訴えを東京地裁へ起こした。

ジャーナリズムの底辺に横たわる深い闇

裁判も五年目に入り、上村夫妻の起こした訴訟は「上村君過労死裁判を支援する会」の活動に支えられて反響を呼びつつある。日本新聞労働組合連合などの協力で新聞奨学生の「二一〇番」なども始まり、労働基準法が適用されていないと言われていた新聞販売現場の労働実態が徐々に

に明らかになってきた。東京都内には一万人の新聞奨学生がいるといわれているが、彼らを対象にサンプル調査を実施した成蹊大学の学生・吉川将人によると、有給休暇が「まったくない」「あるけど貰えない」と答えた奨学生は約五割に上った。また、給与に関しては、未集金分の立て替えを強制されたり、不配での罰金や集金率で天引きされたケースが調査対象の半数を占めたという。

カズ子は長年にわたり勤めてきた美容院を、辞めてしまった。最初は二、三カ月のあいだ休む予定だったが、えがでできなかったのだ。かつての雇用主が「これではあなたがダメになる」と励ましてくれたが、修一と同年代の青年の姿を目にするたびに涙が溢れてきて、耐え切れない悲しみと怒りに襲われるのだった。修一がダイビングの指導員になって、大阪へ帰ってくるのがカズ子の夢だった。

私は丘の上から調布の街を見下ろしながら、もういちど修一が上京してきたときのことを想像した。もし、私が修一と同じ立場なら、自宅の前を流れる春の野川の辺に立ち、これから始まる生活に胸を躍らせたに違いない。兩岸を覆う草木の淡い緑も、川面の輝きも、透明な空の色も、新しい門出を演出してくれる永遠の光景としてしっかりと脳裏に刻みつけたい。修一が生きていれば今年一月、二六歳を迎えていたはずだ。

一方、久尾は読売新聞社の販売から身を引いた後、栃木新聞社の販売局に一時的に就職したが、再び読売新聞社に引き抜かれて、名古屋で三店の新聞販売店の経営に従事した。中日新聞社の勢力が極端に強い地域で、部数拡張競争に勝つためには、有能な所長が必要だったのかもしれない。が、日本ABC協会の部数調

査を見る限り、この地域に関して読売新聞社は今も依然として低迷を続けている。さらに久尾は九五年、名古屋の三店の販売店を引き払い、福岡県の直方市へ引っ越した。やはり読売新聞社の販売店の経営に携わっているらしい。しかし、なぜ九州の辺鄙な地へと追いやられてしまったのだろうか。部数拡張上の戦略なのか、それともほかになにか事情でもあったのだろうか。久尾育史の半生を思うとき、部数拡張の旗振り人として全国をたらい回しにされた孤狼な男の姿を重ね合わせてしまうのは私だけだろうか。そんな自問を繰り返しつつ、上村過労死裁判の行方を見守るとき、日本のジャーナリズムの最底辺に横たわる深い闇の内側がほの見えてくるのだった。

（敬称略）

成され、初の裁判に向けたホームページもすでに開設されています。こちらの方も戦力募集中。